

令和五年度 国語（文学科 日本語日本文学専攻）解答例

一 (一〇〇点)

問一 ① 証拠 ② こうそ ③ 基準 ④ ごい ⑤ みぢか ⑥ じしゃく ⑦ ひゆ ⑧ 対照

⑨ 境界 ⑩ 領域 (三〇点)

問二 ア 文章 イ 砂鉄 ウ 言語 エ 自動記述と公案 (二〇点)

問三 文章は、書かれた瞬間に、書いた作者から離れても社会的に機能するものとなること。(一二点)

問四 自分の経験に裏付けられた意味の深さを持たない言葉によって書かれた文章のこと。(一五点)

問五 能動、意識(七点)

問六 文章は、個人の必然的な選択によって作り出されるものであるが、一方で、個人の意志に反した形で、言葉自身の力で意味が生成される状態を引き起こすものとしてもあるということ。(一六点)

二 (六〇点)

問一 たまう ウ音便 たまひ (六点)

問二 B このように申し上げてください

C 会うことができそうになかったので

D 参上なさらないください (三〇点)

問三 なきて 「(千鳥が)鳴きて」と「(私が)泣きて」との掛詞(九点)

問四 その昔の八月十五夜も竹取の翁が(かぐや姫を)毎晩泣いて留めたことでしょう。(そのように私が泣いて留めても)あなたは父君のところは今宵八月十五夜に行くのですね。(一五点)

三 (四〇点)

問一 かつて もし(八点)

問二 五月の臨平山のふもとの道から湖を見渡すと、ハスの花が湖の中州一带に無数に咲いている。(八点)

問三 まさに「むすうていしうにみつ」といふべからず(と)(八点)

問四 イ(六点)

問五 慣れてしまうと内容に矛盾があっても気にならなくなり、正しく改めると逆に違和感を感じてしまう。(二〇点)